日本経済新聞（夕刊）　2010年（平成22年）7月15日（木曜日）

北里研究所 名誉理事長

大村（おおむら） 智（さとし）さん

人間発見

研究を経営しよう ④

ゴルフ場近くの土から菌採取、世界的な薬開発

研究所閉鎖の判断に反発、経営に関与し始める

薬の売り上げ好調、特許収入で病院建設

ペニシリンの発見（1929年）以来、微生物がつくる抗生物質が次々と世に出た。しかし大村さんが新物質探索に力を入れたころは、むしろ化学合成による新薬製造が注目を集め始めた時代だ。「もう優れた抗生物質は見つからない」。そんな雰囲気の中でホームランを打った。

73年から始めたメルクとの共同研究では最初から動物薬を狙いました。人間の薬は多くの人が取り組んでいました。1㌘の土には1億個の細菌がいるとされます。研究室の面々はみな財布の中に小さなビニール袋を入れていて、外出先で必ず土を採取してきます。

研究室では様々な培養条件で菌を培養し有用な物質を出すものを選抜します。2年ほどすると面白いものがそろってきました。その中で、静岡県川奈のゴルフ場近くで採取した土から、イベルメクチンをつくる菌を見つけました。

寄生虫を殺す動物薬として81年に発売すると、世界的なベストセラーになりました。牛や羊、豚などほとんどの動物で効果があり、食糧増産に役だったと思います。さらに人間の病気であるオンコセルカ症に効くことがわかり、88年に世界保健機関（WHO）がアフリカなどでメルクの無償提供によって集団投与を始めます。

オンコセルカ症撲滅作戦の現場を訪ねる

2004年に現地を訪れた際に、小学校で子どもたちに話をしました。「日本を知っているか」と尋ねても、あまりかんばしい反応はありません。「メクチザン（イベルメクチンの商品名）を知っているか」と言うと、みな「メクチザン、メクチザン」と声を上げます。それほど浸透していました。イベルメクチンはリンパ系フィラリア症（象皮病）にも効果があることがわかり、WHOはその制圧にも乗り出しています。

私は化学出身のせいか、微生物の専門家からみると少し突拍子もない仕事を命じます。その結果、非常に多様な菌を見つけることができ、メルクから評価されました。メルクも私たちが見つけた菌や物質を徹底的に調べました。その徹底ぶりは日本企業ではまねができないと思いました。イベルメクチンをつくる菌はどこにでも見つかるものではありません。おおもとの菌は私たちだけが大切に保管しています。

大村さんが研究所の経営に深く関与せざるを得ない事態が起きた。経営陣が研究所から人材や資産を北里大学（当時の学校法人北里学園）に移し、不採算の研究所を閉鎖する判断を下そうとしていた。もともと研究所から生まれた大学だが、関係は逆転していた。大村さんは反発する。

北里柴三郎が創立した研究所は国際的に知られた存在です。それをなくそうとは言語道断でした。そこで経営陣に「研究室をそっくり私に貸してください」と言いました。私が研究室に入れる研究費の12%を支払い、研究室の職員や事務の人たちの面倒をみるという条件を示しました。

今考えると、よくそんなことを言ったものだと自分でも思います。共同研究が継続される保証はなかったですから。研究費がなくなったらどうする。そんな夢を見て夜中にはね起きることもありましたが、ともかく研究は継続できました。

イベルメクチンのほかにも成果があり、共同研究は20年間続きました。私は研究所の副所長、のちに所長（90年から）として、研究所と、研究所付属の病院（東京・港）の立て直しに取り組みました。貸借対照表も見たことがない素人でしたので、経営学の専門家に一から教えを請いました。

イベルメクチンが売り上げを伸ばし、年間16億円ほどのロイヤルティー収入が研究所に入るようになったのは追い風でした。借金を返し病院を建て替え、黒字経営ができるようになりました。埼玉県北本市に新しい病院（北里研究所メディカルセンター病院）と看護専門学校を建てました。特許収入で建てた病院は世界でもこれだけではないでしょうか。

08年には研究所と大学を統合した学校法人北里研究所が発足しました。「研究所と大学の2つの車輪が健全にまわることが、オール北里の発展の道だ」と唱えてきた理想が実現したのです。

（聞き手は編集委員　滝順一）